

映像の教育活用研究

～100歳医師のドキュメンタリーを事例に～

関 智 征

1. はじめに

本論はクリスチャン医師・駿河敬次郎氏のドキュメンタリー映像をキリスト教教育に活用するための教育研究である¹。駿河敬次郎医師（1920-2023年）は、日本の小児外科医のパイオニアである。敬虔なクリスチャンとして社会に貢献してきた²。その生き様を記録した動画素材を用いてキリスト教教育の現場での動画の教育的な効果を調査する研究である。

具体的には、2022年度フェリス女学院大学「キリスト教I」および2023年度フェリス女学院大学「キリスト教I」講義において参加学生に駿河医師ドキュメンタリーの動画クリップを観せ、定性調査（アンケート）を行った。その調査結果を踏まえ、効果的な映像の作り方や見せ方など教育方法を考察した。

けだし、キリスト教教育において歴史上の人物の生き様をとおして現れる隣人愛の実践は教育においてケース・スタディとして用いられてきた。この点、駿河敬次郎医師の医学的な貢献に関しては、既存の文献で公表されている。一方で、駿河敬次郎のキリスト教信仰の側面については、公にされたものがほとんど存在しない。そこで、駿河敬次郎医師の102年の人生を概観しつつ、そのキリスト者という側面に光をあてた映像を製作し、教育に用いることで駿河医師の社会への貢献とキリスト教信仰のかかわりを学生自身にも考察してもらう。その際、101歳まで現役医師として働いていた駿河医師のキリスト教信仰や生き様を講義の中でどのような文脈で伝えれば、学生が自分自身にひきつけてキリスト教を理解できるかという教育効果に着眼した。

映像の内容は駿河敬次郎医師の生涯の記録である。今回は、キリスト者としてどのように仕事に向き合ってきたかという姿勢を取材した映像クリップをフェリス女学院大学の講義で学生に観せた上で、定性調査を実施した。その上で調査結果を分析し、教育効果を検証した。

2. 定性調査の方法

（1）使用した映像

拙論『駿河敬次郎医師とキリスト教』でも論じたように、駿河敬次郎医師の生涯は時系列に分けて考えられる³。すなわち

- 1 本研究の基礎的な考えは、キリスト教教育学会「キリスト教教育におけるメディアの活用」（2016年6月15日発表）を土台にしている。
- 2 順天堂大学医学部名誉教授。関智征『駿河敬次郎医師とキリスト教』フェリス女学院大学『キリスト教研究所紀要』第8号、105ページ。
- 3 関智征『駿河敬次郎医師とキリスト教』103-107ページ。

- ① 青春期（金沢での幼少期、旧制第四高等学校、東京帝国大学、軍医時代）、
- ② 戦後の小児外科を開拓する時代、
- ③ 大学病院を引退後の八重洲クリニックでの診療時代、
- ④ ノアクリニックでの晩年

という人生の春夏秋冬である。

- ・ 予告編 100歳現役医師ドキュメンタリー予告編1分⁴
- ・ 本編インタビュー
- ・ 春夏秋冬の映像
- ・ エンドロール

これらの映像を製作し、約3分のビデオ・クリップに分割して学生に観せた。

映像の特徴として、医療関係者やクリスチャンしか理解できない専門用語を極力排除したことである。そして、20歳前後のキリスト教と今まで接点がない学生も興味を持てるよう、学生に馴染みの深い唱歌（ふるさとなど）をBGMに用いつつ、人生の四季という明確なテーマを定めた。その上で、キリスト教の隣人愛の実例を駿河敬次郎医師の関係者へのインタビューも交え、伝えたことが特徴である。駿河敬次郎医師の「過去にしばられず前を向く信仰者としての姿勢」「天職を見つけ人に役立つ喜び」などを切り口に、仕事への取り組みの通奏低音として流れる駿河医師の信仰を透かし彫りにした映像となっている。そして映像の中心メッセージは、「辛い状況、理不尽な事態にもかかわらず、愛する」「救す」「使命を頂く」「大いなる力に生かされる」である。

（2）講義の設計

90分講義の中で、以下のようにビデオを観る時間、学生同士が話しあう時間、アンケートを書く時間などブロックの切り替えを意識的にを行い、学生の集中力を保つ工夫をした講義設計の中で研究調査を行った。すなわち「講師の口頭での説明（1-3分）→ 動画クリップ再生（3分）→ 講師の補足説明およびお題提示（1-3分）→ 学生が二人一組になってお話を話し合う（3-7分）」の流れである⁵。その上で各グループの代表に口頭でクラス全体に発表してもらい時間も設定し、その後にアンケートに書いてもらうという流れで講義の組み立てを行った。

（3）定性調査の内容

アンケート調査については「映像への感想」という定性的調査に絞って行った。映像への感想という問いは、どれだけ学生が講師の意図（駿河敬次郎医師のキリスト者としての生き様から学生がキリスト教信仰について思索を深めること）をつかめているかを測る設問である。設問の回答はバイアスや誘導

4 https://www.youtube.com/watch?v=_JCFKgqNBxo 2024年1月4日確認。

5 明治学院テキスト作成委員会 [編] 『ヤバイぜ！聖書（バイブル）あなたに贈る40のメッセージ』新教出版、2019年のアクティブ・ラーニングの項目も参照した。

をできるだけ避けるため自由記述式で行った。

設問を設定した際、以下をベンチマークすることにした。すなわちアンケートにおいて①映像への全体的な印象、②駿河敬次郎医師の人生についてどれだけ触れているか、③キリスト教の理解についての記述がどれくらいあるか、の3点である。この3点に基づき、映像をとおして学生がどれくらい自分自身にひきつけてキリスト教を理解できているかを分析する。そして、映像の中心メッセージである「辛い状況、理不尽な事態にもかかわらず、愛する」「赦す」「使命を頂く」「大いなる力に生かされる」をどれだけ学生が理解したかをみていく。

3. 定性調査（アンケート）の学生の解答

映像への感想（解答数 55）⁶

自分が訴えられているのにも関わらず、赦してあげようという心の広さはイエスと同じものを感じました。102歳にもなって医者を続けるというだけでもすごいのにその心の広さや誰かを助けよう、患者さんを助けようという気持ちは私には到底まねできないもので尊敬します。

駿河先生についてのお話を聴いて、まずは人生を春夏秋冬に分けてドキュメンタリーを構成しているということが素敵だなと感じました。私が駿河先生の立場であったら、もっと年長者ということに盾に威張ったり、そのような理不尽なことがあった際には相手をずっと憎んでしまうと思います。しかし、駿河先生は、実力や年齢といった肩書きよりも敵を作らない平和を大切にしていっしょということでした。これはまさしくキリスト教の教えを反映している姿勢だと感じました。また、関先生がご病気をされた際に、駿河先生が「前にある希望を見ていきましょう」といった言葉をおかけになったということが印象的でした。このような人間性を持った人に私もなりたいたいと強く思いました。

100歳を超えても尚医師として活躍する姿に感動しました。もし自分だったら絶対にあんなに続けられないと思うので本当に凄いことだと思いました。また、駿河先生の言葉で「どんな苦しいことでも嫌なことがあっても必ずそれはあとから考えてみると役に立ってるんです。だから細かいことは気にしないでニコニコ笑ってるのが1番いい」という言葉がとても印象に残りました。自分が嫌なことがあったときや、苦しいことがあった時この言葉を思い出せば少し楽になれそうな気がしたからです。どんなに嫌なことだと思っても役に立つのなら色々なことに負けずに頑張ろうと思えました。

人生には、登り坂、下り坂そしてまさかの坂があるとは初めて聞いたが、とても共感できた。「人生は旅である。外なる人は衰えてしまうけど、内なる人は新しくなる」という言葉も印象的でした。そして「人生の旅において、イエスは決して私達を置き去りにしない、旅を共にしてくださる」と聞き、とても心強く思った。沢山の辛いこと、苦しいことがあっても、今は人生の旅の途中に過ぎず、旅の終着点

6 定性調査の一部は下記のurlにも公開している。https://note.com/seki_tomoyuki/n/nebdb65f7abd9

は天の故郷であるということを知ることができたので、今までより軽い気持ちで、明るく前に進んでいけるような気がした。駿河先生や関先生のような「救し」は誰もが簡単に出来るものではないけど、神様が救すことが出来ると思った人にしか与えない人生の旅の中の1つの出来事では無いのかと思った。

今まで駿河先生のお話は少し聞くことはありましたが、詳しく教えていただくことはなかったので、最後の授業でどんな方なのか聞くことができてよかったです。敵を作らず、友を作ることが大事。「過去」にどんなことがあっても後ろを見ずに前を向いて生きるために人を許す、「今」いる患者さんの命を救う。など学ぶ言葉がたくさんありました。「戦争で死んだ仲間の分も現役で働いて患者さんを治すその病院で死ねたらいい」というような死生観は簡単に思えるようなことではありません。医者という職業が駿河先生にとって生きがいであり天職なのだなと思いました。

駿河先生のすごさが分かる動画でした。駿河先生が受けた数々試練を授業で聞きましたが、私だったら許せないな、立ち直れないなと思うことを駿河先生は広い心で寛容になりこの世の流れに身を任せて生きていてすごいと思いました。

駿河先生の死生観に衝撃を受けました。仕事をしながら亡くなりたいというのは、一種のプロ根性のようなものを感じます。同じような話を、舞台役者の方も言っていました。

最近では、定年退職後は「第二の人生」として余生を過ごすことが流行りだと思います。しかし駿河先生は最期まで現役でいたいという願いを持っていて、いかに戦死した仲間たちへの想いが強いのか分かります。

一世紀も生きていれば、世の楽しさも辛さも十分に経験しているでしょう。そんな人から言葉をかけられたら、思い悩んでいる人はきっと気持ちが楽になるだろうと思います。

駿河先生はいつまで経っても謙虚であるということがすごいと思いました。また、私は今まで敵を作りがちだったのですが、敵を作らずに友達を増やすということを私も実践しようと思いました。許せない人がいてもいつまでもその傷に留まるのではなくて、前に進むということはなかなかできないことだと思いました。どんなに苦しいことでも嫌なことがあっても必ずそれは後になって役に立っているというのは私も共感できました。

ここまでたくさんの人に慕われている人はなかなかいないと思いました。まさに神様に生かされているような方だと思います。

患者さんのコメントなどを聞いていると、駿河先生の、人柄の良さが伝わってきた。関先生自身も途中で登場して、コメントしているところも良いとおもった。駿河先生の、謙虚で偉ぶらない、ところがとても好感が持てた。「救しの人」という言葉が、とても印象に残った。部下が、クリニックが潰れる程のミスを犯しても、「人間ってこんなもんだよな」と、その部下を救していることに温かみを感じた。

人を責めるよりも、目の前の患者を助けたい、と思うところがカッコイイと思った。

正直、100歳と聞き、寝たきりの印象を持っていました。しかし、動画でみてみると私よりも何十倍努力をして、人のために働いていました。その姿に感動し、私も将来このような素晴らしい人間になりたいと感じました。すてきな方に会えてよかったです。

この方のおかげで数え切れない人数の方が救われたと思うと私自身も感謝し、その上医者として命を繋ぎ止めてくれているこの偉大な方に感謝を伝えたいです。私もこのように人間性に満ち溢れ、周りからも愛されるような人になりたいと思っています。

駿河先生の「苦しいことがあってもいずれその時に感じた苦しい思いが役に立つ時が来る」という前向きな言葉に感動しました。私は、どんなに小さな嫌なことでも、とても引きずってしまったり後悔して落ち込んでしまうので、駿河先生の笑って前に進む・気にしないという考え方を自分も参考にして生きていきたいです。これから、生きていく中で困難や、悲しみ、苦痛などのたくさんの重荷を背負って生きていくことになるだろうけど、少しでも自分に対しての負担を減らせるように、もう少し駿河先生みたいにポジティブに考えたいと思いました。

100歳で現役のクリスチャン医師ということで、タイトルだけを見てもとても凄いことだなと思いました。100歳になっても心身共に健康でいることは難しいと思うし、その健康があるからこそ人々に安心感を与える笑顔が生まれるのかなと思いました。また、100歳まで多くの患者と向き合い、医師を続けてこれた理由にはキリスト教の精神があるのかなと思いました。いつでも隣人を愛するという事は患者に向き合うということに繋がっていると考えました。そんな先生の人柄が素晴らしいと思いました。

私は内容もちろんですが、関先生の行動力が素晴らしいと思いました。自分に対して良い影響をくれた人をさらにみんなに広めたい、という気持ちを持つのはわかりますがそれを実際にドキュメンタリーという映像として残すというのは流石だなと思いました。私も良いな思ったり人に伝えたい、後世に伝えたいと思った事は積極的に何か形の残るものとして現れるような想像力、行動力のある人間になりたいなと思わされたドキュメンタリーでした。

駿河先生は映像でも見た通り優しい顔をしていて心が暖かい人なのだろうなと感じました。理事長だった頃に騙されても人だからね、こういうこともあるよねという考えが私には無かったので、本当にこんな優しい方、まさにイエス様みたいな方がこの世にいることに驚きました。102歳になっても元気でいて欲しいと思いました。

とても素晴らしい方だなと思いました。この方はイエスを信じているからこそここまで心が広く豊かな方なのだなと思いました。

.100歳になっても現役で働き続けているなんて凄いなと思いました。また、偉大な人なのに謙虚であるところがすごいなと思いました。

先生の、部下が悪いことしてもそれを赦すという精神がとても驚いたし素晴らしい方だと思いました。私だったら絶対に許せないしずっと根に持つと思うのに先生は本当に偉大な方だと感じました。またあんなに人のために一生懸命尽くしているにも関わらず見返りを求めず謙遜していて本当に凄いなと感じました。先生の一に敵なし、二に政治、三、四がなくて、五に実力という言葉は非常に印象的でした。

許すことの大切さをお医者さんから学んだと仰っていましたが、もちろん許すことはとても素晴らしい大事なことです。しかし許さなくてもいいと私は思います。ただ執着はするべきではないと思います。お医者さんの好きな仕事をしている間に死にたいという死生観には共感できるものがありました。神様のタイミングという考え方も自分の考えに取り入れます！

過去につらいことや悲しいこと、思い出したら怒りが湧いてくるようなことを引きずらず、今日の前にいる患者さんに目を向けて生きる駿河先生は立派な方だと思いました。戦争でたくさんの同級生が亡くなり、その方たちの分まで生きねばという思いがあると聞きました。亡くなった私の祖母も戦争を経験していて、何度も空襲の話をしてくれました。祖母も自分だけが生き残ってしまったという思いが強く、教師としてたくさんの生徒に音楽を教える道を選びました。その思いは伝わったようで、亡くなった時も生徒の方からたくさんの言葉を頂きました。駿河先生も関先生を含め、たくさんの人の命を救い、心を癒してきたんですね。自分のドキュメンタリー動画を作成してくれる方がいるなんて、きっと駿河先生はすごく嬉しいと思います。天のふるさとに帰ってイエスのところに行く希望があるからこそ、長く地上での旅を続けられるのかなと思います。いつまでもお元気でいてほしいです。

とても素晴らしいドキュメンタリーでした。駿河先生の素晴らしい人柄が見られるドキュメンタリーで102歳で現役の医者をしている事に驚きました。とても健康な方なんだなと感心していました。戦争で色々経験されて周りが命を落としてしまいとても辛かったと思うとその分頑張って働いていらっしゃる駿河先生を尊敬します。中でも印象的だったのは騙されても怒らずいられることに私はどこかイエス様と似ていらっしゃる所があるなと個人的に思いました。人々の為に自分が何かできることがあるかもしれないという先生の志が素晴らしいなと思い、私も他者の為に何かできることをする大切さを教わりました。

人を許すということについて、なにか自分を傷つけられた、また当時はそう思っていなくてもあれは決してよくない影響で今も悪い意味で反映されてしまっているというような事を受け流すことができないのは、誰かのせいにしておこうという邪な部分であると思い知らされました。自分自身をよく受け入れその邪な部分という人間らしさを愛することができて、且つ生きてきた道のすべてを本当に誇れ

る人がたどり着ける道ではないかと考えます。

座右の銘がとても印象的でした。また、駿河先生は救しの人のように思います。トマスウィン宣教師が教会で亡くなったことから駿河先生も診察しながら亡くなりたいという考えは医師が天職だと私は考えました。個人的な話にはなりますが、母が美容師をして、最近転職をした新しい職場が最後の場所だったら良いよねと話していたことが一緒でした。自分もそのようになりたいです。

駿河先生は救しの人というのがとても刺さりました。「人間てそういうもんだよ」という言葉には諦める事救すことをマイナスに捉えない視点でなんて心穏やかな人なのだろうと思いました。心穏やかにイエス様の恵みを信じて、イエス様の御心を真似て穏やかに受け入れていく姿勢が、関先生の心を救った様に、患者さんみんなの心を救っていくんだなと感じました。

駿河さんは地位として認められていていわゆる偉い人として認められていても「親しみやすい方」と口を揃えて周りの人たちが言うのはすごいと思った。周りの人に対して平等に接したり、同じ目線で接するというのは自分の環境が変わると特に難しいと感じる。しかし駿河さんはそれを当たり前のようにこなすというのがすごいと思った。駿河さんの言葉で「敵を作らずたくさんの味方を作る」というのを聞いて自分の生き方を振り返った時に高校生の頃部活で全体がうまくいかなかったり、何かをまとめるためと言って自分の意見ばかり押し通したことがあった。自分でも敵を作っていることはわかっていながらも行動していたので良くなかったなと心から感じた。

苦しいことがあっても後から考えたら役に立っている。細かいことは気にしないで笑うのが一番という言葉が心に響きました。敵を作らない生き方はマネしたいと思ったし見習いたいと思いました。

凄く優しい方なんだと先生の話聞いてて思いました。駿河先生が仰った「敵だけは作るな。味方、友達を作ることが大切。」という言葉が凄く刺さりました。私も駿河先生のように『誰でも過ちを起すことはあるから許そう』という考え方をもちたいなと思いました。

まず、102歳になった今でも現役で若い時のまま患者に接しているのがすごいと思いました。偉大であるのにいつも謙遜しているから誰からも愛され、慕われ、尊敬されているのだなと感じました。クリスチャンとして、全ての人と平和な関係を築くことを目指す姿を見て、敵を作らないことの大事さを実感しました。動画内で、この方のようになりたいと仰っている方がいて、こう思ってもらえるのはとても幸せな事だと思いました。私も他の人からあの人のようになりたいと思ってもらえるような生き方をしていきたいと思いました。

苦しいことも後から考えると役に立っているという言葉が印象的でした。苦しい時でもニコニコ笑ってられるように私もなりたいなと思いました。人を嫌いになったりやり返してやろうということに意識

を向けて、目の前にある楽しいことを見逃してしまったらもったいないなと思いました。

100歳で現役医師なのがすごいなと感じました。また、80歳でテニスをするなどとてもバイタリティーに溢れている方だと感じました。ここまで長く医師を続けて来られたということは強い意志があるからこそ出来ていることなのだなと感じました。授業でもありましたが好きな仕事をしていながら一生を終えるというのはある意味では人間にとって幸せなことなのかもしれないと感じました。先生の名言である「敵を作らない」というのは人生においてとても大切なことだと感じました。また、それが先生が周りの人に尊敬をされて愛されている理由でもあると感じました。先生は戦争などいくつもの困難を乗り越えて今があると考えるとやはりものすごい意志があったのだなと感じました。天の故郷に帰るその日まで先生のように誰かのために人生をかけられるのは素敵なことだと思いました。

敵を作らず、仲間を作ることが大切という言葉がとても心に響きました。仲間を作ることで、お互いに辛い時や困難に陥った時に助け合うことができます。人は1人では生きていけません。そのため、多くの人と仲間になり、助け合って生きていくことが必要だと思いました。駿河先生がおっしゃっていた人を許し、前を向いて歩いていくことの大切さを聞き、私も恨んでいる人を許し、前を向いて新しいことにチャレンジしていきたいと思いました。

動画を見て、駿河先生を全然知らない私でも、駿河先生の偉大さを感じました。また、エンドロールを見て、時代を感じる写真が多く使われていて動画を見終わったあとにこのエンドロールを見ると、凄く心動かされ、感動するものになったと思った。

まずこのドキュメントを見るにあたって、100歳のおじいちゃんがお医者さんをこの年まで続け沢山の人を救っていることにとても驚きました。年の取り方は人それぞれで違うため、80歳を過ぎても元気な人もいれば、もうあまり元気のない人もいます。そんな中、100歳にもなる人が医師を続けているのはとても凄いことだと思った。こんな偉大な人なら威張ったりしてもおかしくないのに、自分をとても謙遜しているところが多くの人々に愛される理由なんだなと思った。

駿河先生の座右の銘がとても素敵だなと思いました。敵がないことが一番いいと言うのは本当にその通りだなと思います。人間関係が良好な方が色々なことに成功しやすいと思うので、敵を作らないように人のことを思って行動することはとても大事だと思いました。それから、駿河先生の赦しの気持ちを私も見習いたいです。私は自分に嫌なことをする人の事を許して仲良くすることは出来ないのですが、もっと寛大な心を持って受け止められるようにしたいです。

私自身今まで生きてきた中で、特段大きな怪我や病気も無く、病院に罹ることと言えば軽い風邪やインフルエンザのような感染症でした。なので、大きな怪我や病気等で命を救ってもらったという経験はないために、どれだけの感謝を抱いているか分かりません。ですが、仮に私が大きな怪我や病気をしたと

きに、命を救ってもらえたら、駿河先生のようなお人柄の先生に救ってもらったらどんなに気持ち良くなるか、良いだろうかと思いました。お医者さんということだけでもすごいので多少威張って良いのに、それをする事なくむしろ謙遜しているのにお人柄を感じました。

医者という職業は他の職業よりも大変だから結構気が強い方が多いイメージがあります。

定年退職は65歳だから本当は約40年前に仕事を辞めていてもおかしくないのに続けていることがまずすごいなと思いました。また、仲間を作ることは普通のことだけど敵を作らないことは大変なことだしむしろ仲間より敵の方が多世の中で戦争が行われていた時代から生きている医者が言うからこそ説得力があるものであるなと思いました。仕事をしながら死にたいというのも本当にこの仕事が好きだからこそ言えることであり、実行できるものであるなと思いました。

今日のお話で最も印象に残ったことは、「味方を増やさない」という言葉です。中学時代に私も人から嫌なことを言われることが多く、死にたいと思うこともありましたが、でも、いつも傍にいてくれた友人たちのお陰で立ち直ることができました。今となっては「そんなに色々な友達作ったらお金もなくなるし大変じゃん！」と友達に指摘されるくらいに友達が周りにいてくれます。この言葉は本当に共感できるし、私もそれを信じていきたいと感じました。

100歳を春夏秋冬に分けているのがすごい面白いなと思い、それが聖書の言葉からきているのだと知ってすごく素敵だと思った。チャペルを通してふるさとに親しみを持つことができた。自分の恩人に何かする、送ることができるのは素敵だと思った。私はイライラしたことは抑えられない、ましてや別の方向に考えるなんてことはできない。だからそれを実現できる駿河さんは本当に偉大な人だなと感じた。ナレーションを先生がやられてる予告編をみて、自分達もコロナ禍で学校説明会ができない時に横浜市のYouTubeにあげるために作った動画を思い出した。CGだったり、ナレーション、脚本、作詞作曲も、撮影、編集も同期で行い大好きな学校に恩返しという形だったのかなと今では思う。私は撮影、ナレーションを担当した。幼い頃から自分自身の声で放送だったり劇だったりをしてきて思ったことは自分の声だから伝えるものは絶対あるということだった。だからたくさん人の“声”が入った先生の作品は予告だけでもとてもわくわくした。

「偉大なのにいつも謙遜している」このひとことに駿河敬次郎先生のお人柄が表されているように感じました。「どんなに苦しいことでも嫌なことがあっても必ずそれはあとから考えてみると役に立ってるんです。だから細かいことは気にしないでニコニコ笑っているのが1番良い。」この駿河先生のお言葉で救われる人が大勢いるのではないかと思います。私も救われました。また、「1に敵なし、2に政治、34がなくて5に実力」この座右の銘に「偉大なのにいつも謙遜している」という担当の方の言葉が結びつきました。駿河先生のように自分をもって強く、そして人も助けることができる、そんな人になりたいなと思いました。

100歳を過ぎても患者お救いになった先生がとてもすごいなと思いました。誰かの命の為に最後まで働き続ける姿や、みんなの心を癒す笑顔が本当に素敵だなと感じました。関先生の命の恩人と言っていた意味がとても分かりました。今まで生きてきた中でたくさんのつらい経験や、ひどいこともされたが「神様は見ているから」とただ患者さんの命を救うことに専念した先生はとてもたくましく、心の広い方なのだと感じました。最後にお話くださった四季感じる聖書もよかったです。

100歳を過ぎてもなお、医者として患者さんを助けている駿河先生の存在を知って、とても偉大な方で尊敬できる素晴らしい人だと感じた。

偉大でも、謙虚であるという一緒に働く人からの意見が動画に含まれており、私も謙虚であり続けなければならないと改めて考え直すことができた。関先生からのお言葉には、「出会いの背後には神がいる」「人生は出会いによって変わる」という内容がとても心に刺さりました。

とても偉大な方であり、人としてすごく尊敬することができる人物であると思いました。長く一つのことを続けていくという行為はその人の強みであり、一見普通なことのように思えてもとても難しいことだと思います。真似したくてもとても真似できない凄い人だなと思います。私も、少しでも駿河先生に近づけるように謙虚にがんばって行きたいと思いました。

駿河先生の考え方としての歩みや心深さを知って、新しく学んだ事柄が多くありました。100歳を超えても、患者さんのため、また、戦争で亡くなった仲間のために医者として働き続ける姿勢に非常に感動しました。誰に対しても謙虚な心を忘れず、優しく接することはそう簡単なことではないと思います。特に印象に残ったのは人を許せる心です。不正をされても訴えず、その人を許したことを知り本当に心が広い方だと思いました。私も駿河先生のように人を許せる人になりたいと思いました。そのためには、自分が人にしてもらったたくさんの恩を忘れないようにしたいです。また、先生と駿河先生がテニス仲間だったことを知り、縁は本当に大切なものだと思いました。今の出会いに心から感謝し、関わってくれるすべての人を大事にしたいです。

先生と駿河先生との出会いは、最初は普通のテニス友達だったのに医者と患者関係を経て、今では恩師という関係になっていったのは偶然でもありながら運命的であったなと感じた。これを見て、私も偶然の出会いをすごく大切にしたいと思った。先生が作成した駿河先生のドキュメントが完成したら、見てみたいと思う。

まず、関先生が人生の中で彼と出会えたことがまさに神様のお導きだと感じます。私も元気な関先生に出会い、講義を受ける事ができたことをうれしく思っているのも、間接的に駿河先生に感謝しています。彼がこれからも長生きされて、もっともっと大勢の人々の心身を救われることを願います。

戦争を経験し、友達を失った苦しみ等があるからこそ、今の寛大な心や優しさ、いつもニコニコしてい

る先生がいらっしゃるのだと思いました。私も辛かったこと、イラついたこと、失敗したこと等をよく1人で思い出して後悔したり、泣いたりすることがよくあります。時には本当に死んでしまおうかな、消えてしまおうかな、となることもしょっちゅうあります。ですが先生のおっしゃる通り、味方を増やすことで私自身のことを理解してくれる人、応援してくれる人、助けてくれる人がいるんだなと感じたし、改めて今私の味方でいてくれる友達、家族に感謝して生きていこうと思いました

授業の中で一番印象に残ったのは「敵を作るな仲間を作れ」です。私は自分のことでいっぱいになると周りが見えなくなってしまう。そのため思いやりの心を忘れてしまう事が多々あります。さらに家族や友達に声をかけてもらったのにもかかわらず、受け止めることができない時もありました。特に中学の部活動で部長をやっていた時にコンクール前で自分だけが頑張っている仲間を置いてってしまい、気づいたら一人だったことを思い出すと今でも怖くなります。しかしそんな私を救ってくれたのは家族が言ってくれた「自分一人では何もできない、仲間を沢山作りなさい」という一言でした。私はよく理解できませんでしたが一緒に同じ目標に向かって頑張る仲間を作るところから始まり、昼休みの個人練習で初めは一人だったのですが四人の仲間と昼練習をするようにまじりました。コンクールもこんな私に皆がついてきてくれてくれたおかげで前年よりいい成績を残す事ができました。その時初めて仲間がいかに大事かということを理解することができました。

お話の中で、駿河先生は“救しの人”“敵を作らない”というお話があり、関先生は、ある人からとても酷いことをされ精神疾患を患ってしまったというお話で、今でもその人を思い出して怒りの感情が込み上げてきてしまうが、駿河先生の“救し”という言葉を出して抑えているというのを聞いて、これは、イエスが、自分が処刑される直前にも、「どうか彼らをお許しください」と言ったのと、聖書のエペソ人への手紙4章32節の、「互いに情深く、あわれみ深いものとなり、神がキリストにあってあなたがたをゆるして下さったように、あなたも互にゆるし合いなさい。」という言葉にも似てるなと思いました。どんなに苦しい嫌なことがあっても必ずそれは後から考えてみると役に立ってるんです。だから今は細かいことは気にせず今ニコニコしているのが一番いいという言葉、私も大切にしておこうと思います！

「一に敵なし、二に政治、三 四がなく、五に実力」という駿河先生の言葉に感銘を受けました。もちろん医者として実力は必要だけれども、“一”とするのではなく“五”にしているところに駿河先生の人柄が垣間見られたような気がしたからです。医者ではなく人としての在り方を教えてくださいました。

駿河先生の考え方、救す姿は私自身には考えられないようなものばかりで衝撃を受けましたが、確かに過去のつらかったこと苦しかったことは今に活着ているものはあるし、振り返って後悔したり憤りを感じ続けるならば、気持ちを切り替えて前を向き、人のためになる行動をしていきたいと思いました。

駿河敬次郎先生のドキュメンタリーを見て患者さんの声や関先生のお話を聞くだけで謙虚・救しの人で

あるという印象をもった。また、苦しめられても人を責めない姿勢やその教えを身近な人に伝え回心させる姿は、イエスキリストの生き方と似ている所があると考え。話は変わるが、私の母は以前の職場でモラルハラスメントを受けて退職した過去がある。母はその事を「人生の汚点」と話しているが、今の職場では程良い人間関係を築き毎日楽しそうにしている。母の「汚点」とする過去がなければ、今の職場とは出会えなかった。出会いの背後に神がいるとはこの事だと推測する。また、駿河先生の現役を続ける理由が「自分の好きな職業をやりながら天国へ行きたいから」だったことに勇気づけられた。人は、自分の夢を諦めてしまう事が多い。しかし、夢とは神様が与えて下さった道であると考え。神様が定めた道を懸命に生きれば生涯ずっと続けたいと思えるような仕事に出会えるのだと教えてくれた。

今日の講義で、クリスチャン医師の先生は本当に色々な人から好かれており、とても慕われているのだなと思いました。関先生ともう一人の方が先生みたいになりたいなと言っていたことがとても印象に残りました。

最初はテニス仲間だった駿河先生と関先生との関係が命の恩人変わったところがとても感動的だなと思いました。駿河先生は暖かい人で多くの人から慕われている理由が分かりました。

駿河先生から味方を作ることや、人を許すことの大切さを私も学ぶことができました。私は好き嫌いがハッキリしているので、酷いことをされたら大嫌いになってしまうことがあります。その部分だけを見ずに視野を広げてその人のことを見ようと思いました。「Everything is Beautiful in God's Timing」この言葉を忘れないでたいです。またこれからの全ての出会いを大切に生きていきたいです。

4. 定性調査の分析

(1) 映像への全体的な印象

・全体の約8割の解答において映像内容について肯定的・積極的な回答が見られた。歴史的な資料を用いて、また春夏秋冬の日本の美しい季節と駿河敬次郎医師の人生の春夏秋冬を重ね合わせた演出により共感を生む、という映像の意図がある程度伝わっていたことの証左ではないか。以下では、駿河医師の人生、キリスト教という具体的なイシューへのコメントに注目して分析する。

(2) 駿河敬次郎医師の人生についてのコメント

駿河敬次郎医師がどのような姿勢で仕事をするか（また、その姿勢の根底にある信仰）については、アンケートからは31名（約6割の学生）がインタビューでの駿河医師本人の仕事観や死生観に言及していた。

「医者という職業が駿河先生にとって生きがいであり天職なのだなと思いました。」

「駿河先生のごさが分かる動画でした。駿河先生が受けた数々試練を授業で聞きましたが、私だったら許せないな、立ち直れないなと思うことを駿河先生は広い心で寛容になりこの世の流れに身を任せて

生きていてすごいと思いました」「私が駿河先生の立場であったら、もっと年長者ということをして盾に威張ったり、そのような理不尽なことがあった際には相手をずっと憎んでしまうと思います。しかし、駿河先生は、実力や年齢といった肩書きよりも敵を作らない平和を大切にしていってらっしゃるということでした」のようなコメントはキリスト教的職業観を学生が考える契機となった証左ではないだろうか。

また「駿河先生の死生観に衝撃を受けました。仕事をしながら亡くなりたいというのは、一種のプロ根性のようなものを感じます」というコメントは、トマス宣教師に影響を受けた駿河敬次郎医師の職業観をよく捉えられていると評価できる。

以上、学生にとって駿河敬次郎医師の人柄について、第三者へのインタビュー映像をとおして約6割の学生が一定の理解を深めた。

(3) キリスト教についてのコメント

27人の学生（全体の5割以上）が「赦し」や、「親切」などキリスト教の根幹のメッセージを汲み取り記述している。たとえば、「自分が訴えられているのにも関わらず、赦してあげようという心の広さはイエスと同じものを感じました」のコメントは、映像の中心メッセージである「辛い状況にもかかわらず、愛する」を的確に言及していると分析できる。

また、キリスト教の死生観に言及した以下のコメントからは、学生が自身の生活に引きつけてキリスト教信仰を考えることができたことがうかがえる。

「人生の旅において、イエスは決して私達を置き去りにしない、旅を共にしてくださる」と聞き、とても心強く思った。沢山の辛いこと、苦しいことがあっても、今は人生の旅の途中に過ぎず、旅の終着点は天の故郷であるということを知ることができたので、今までより軽い気持ちで、明るく前に進んでいけるような気がした。

さらには、「関先生が人生の中で彼と出会えたことがまさに神様のお導きだと感じます」とキリスト教霊性に触れるコメントも散見された。これは、それ以前の講義で「出会いの背後に神がいる」と伝えられたことの相乗効果があったことが推測される。

以下のように発展的学習にまで到達した学生がいたことは特筆に値するだろう。

駿河先生の“赦し”という言葉を使い出して抑えているというのを聞いて、これは、イエスが、自分が処刑される直前にも、「どうか彼らをお許してください」と言ったのと、聖書のエペソ人への手紙4章32節の、「互いに情深く、あわれみ深いものとなり、神がキリストにあってあなたがたをゆるして下さったように、あなたも互にゆるし合いなさい。」という言葉にも似てるなと思いました。

上記の聖書のことばを直接講義中に紹介したわけではないが、学生が自主学習の中で、聖書を調べ、映像と結びつけてコメントしたものだ。

総じて、学生の中に「キリスト教＝心の平安、赦し」のようなイメージが形成されていることが見て取れる。以上、約半数の学生が映像をとおしてキリスト教について思索を深めることができたことと分析で

きる。

5. 結論

(1) 本研究のまとめ

本研究では、駿河敬次郎医師が生き様を記録した動画素材を用いて基督教教育の現場での動画の教育的な効果を調査してきた。学生が自分自身にひきつけて基督教を理解できるかという問題意識のもとアンケートを実施したが、その結果、5-6割の学生が「使命を頂く」「辛い状況、理不尽な事態にもかかわらず、愛する」「赦す」「大いなる力に生かされる」という映像の意図を的確に言及しており、一定の教育効果をあげているといえよう。以上、駿河敬次郎医師の生き様というケーススタディ方式の映像によって、基督教を理解するための素材として半数以上の学生が、駿河敬次郎医師の生き方、基督教について言語化することができたことが明らかになった。

(2) 今後の研究課題

本研究によって、新たな課題が明らかになってきた。以下テーマごとに挙げていく。

a.調査内容について

本研究は定性的調査に限定して行ったが、今後より精緻な調査を行うには、定量的な調査をあわせることも必要であろう。たとえば「高校以前に基督教教育を受けたか」という定量的な調査も考えられる。なぜなら、基督教系の幼小中高の教育を受けてきているかどうかで基督教の基礎理解の個人差が生まれるからである⁷。

b.90分の講義設計の研究

なお、今回の研究では分析対象外であるが、講義の流れについて以下のような学生からの声が「基督教Ⅰ」について挙がっている。

==

「ペアワークやスクリーンも用意されていてとても理解がしやすい授業でした。先生の授業でこれも基督教とかかわりがあったのかと驚くことがありとても楽しかったし、基督教のことが何もわからなかったのですがよく理解できました」

「基督教の教えを自分だけの解釈にとどめず、様々な視点から考え、学びを深めていくことによりつながりました」

⁷ 参考のため、高校以前に基督教教育を受けたかについては事前設問を設けておらず正確なアンケート集計はしていないが講義の現場で挙手によるアンケートで過半数が基督教系の幼小中高の教育を受けてきているようであった。

「ペアワークでは友達を考えや意見を聞くことができ、様々な視点から考える力がついたように思います。そのためペアワーク以外にグループワークでも意見交換をしたり発表してみたいと感じました。」

「先生のお話を一方的に聞く授業ではなく、友達と意見を出し合って自分の知識や考えを深めていくスタイルの授業が私は好きでした」

「ペアワークの時間は今後も継続してほしいと思います。友達の意見や体験談を聞くことで、新しい視点が得られます。ときどき動画・映画の視聴があるのもメリハリがありよかったです」

「友達とも意見を共有できる有意義な時間になったので、これからもこの授業形式を続けていってほしいです」

「友達と話し合いする機会も多く楽しかったです」

==

上記の学生のコメントから、情報量が膨大になり集中力が短くなってきている現代において、90分（フェリス女学院大学の場合）という講義時間において、「講師の口頭での説明（3分）→ 動画クリップ再生（3分）→講師の補足説明およびお題提示（3分）→学生が二人一組になってお題を話し合う（3-7分）」を各ブロック約3分の短い尺で切り替えていくことが、学生の興味や集中力を持続させることにつながっていることが推定できる。この点、映像についての感想も、講義内での口頭発表時よりも、アンケート提出時のほうが言語化が深化している印象を受けた。いきなりアンケートを書くのではなくグループワークをはさみ、他のグループの発表を聴くことで、学生の思考が深まるという仮説を筆者は持っている。講義内のディスカッションや他者の発表を聞くなどのピア・ラーニングがどれだけキリスト教理解を促進しているかの調査研究が今後の課題である⁸。

また、同じ映像でも90分の講義中に、どのようなコンテキストの中で映像を観るかによって学生の理解度や思考に影響を及ぼすのかの研究も求められよう。さらには、15回全体の講義の中での位置づけというコンテキストの研究も今後の課題である。たとえば「関先生が人生の中で彼と出会えたことがまさに神様のお導きだと感じます」とキリスト教霊性に触れるコメントについては、調査より以前の講義で「出会いの背後に神がいる」と伝えたことの教育的効果があったことが推測されるが、15回の講義設計の何回目の講義で映像を使うかによって教育効果が変わってくるのではないかと、という問いが筆者の関

8 今回、ペアワークをとおして学生同士のつながりが生まれ、講義の外でも友人同士がピア・ラーニングする事例がみられた。また、提出された課題について講師が学生に講義内でフィードバックすることで、他の学生のリサーチ方法なども学生が学ぶんだり、過去に自分が書いたレポートを講義内のグループ・ワークで学生が互いに紹介しあい対話することで、学生が自分の思考を整理し、読み手に伝わる文章を作成する動機付けをした。今後の研究として「ペアワークで互いの意見を言う→他のグループの学生の発表も聞く→レポート課題に学生が取り組む」というフローにより学生が自分とは違う視点や論理展開に気づくことで自己の意見を相対化し自己のレポートの論理を深化させる教育的効果の測定などが考えられよう。

心事項である。

c.時代の変化にあわせた講義コンテンツ作り

現代のメディアに触れる環境は、大きな変化に直面している。10代、20代の方々の生活の中心にスマートフォンが位置づけられ、短尺動画の隆盛などメディアの形態も時代に合わせて変化している。その変化する時代において「反転講義とArts教育（映像表現を含む）」などの教育技術をどのようにキリスト教育に応用させるか、またICTの活用（たとえば学生のスマホやPCでCanvaアプリによる学生に制作物のデザインをお題に出すワークの実施、Chat GPTの活用）なども今後の研究テーマである。

<映像制作にあたっての参考文献など>

- ・駿河敬次郎『小児外科』中公新書、1967年。
- ・駿河敬次郎「小児外科開拓の歩み」別冊東京青年、343号、1998年。
- ・駿河敬次郎『ふるさとと私』小児外科Vol.47、2015年。
- ・駿河敬次郎『小児外科の歴史と21世紀への展望に関して』日本小児外科会誌 第37巻2号、2001年。
- ・駿河敬次郎『賛育会創立90周年を迎えて』社会福祉法人賛育会、2008年。
- ・順天堂大学医学部小児外科学教室『小児外科の歴史と共に—駿河敬次郎名誉教授古希記念誌』、1990年。
- ・齊藤實『賛育会の100年』社会福祉法人賛育会、2018年。
- ・本間日臣『若い医学徒への伝言』PDN、2001年。
- ・村上朝子「新生医療の草分け・駿河敬次郎医師は98歳でいままも現役〜」『週刊金曜日』1235号、2019年。
- ・中沢正七『日本の使徒 トマス・ウイン伝』金沢教会長老会、2005年。
- ・東京池袋教会「交わりの会便り」127号、東京池袋教会、2012年。

<講義設計にあたっての参考文献など>

- ・明治学院テキスト作成委員会[編]『ヤバイぜ！聖書（バイブル）あなたに贈る40のメッセージ』新教出版、2019年。

*本論は、関智征『キリスト教教育における映像効果の研究』（アグラ出版、2023年）の一部を大幅に加筆修正したものである

謝辞

本研究は2022年度一般社団法人キリスト教学校教育同盟「キリスト教学校教育振興助成」の助成を受けた研究です。関係者各位に心よりの感謝をいたします。また、キリスト教教育の研究フィールドを提供して下さったフェリス女学院大学にも深く感謝申し上げます。本研究がキリスト教教育の現場で奮闘されている研究者・教育者の方々に少しでもお力になることができれば幸いです。

(せき・ともゆき)

フェリス女学院大学 非常勤講師